

越境する 女性労組

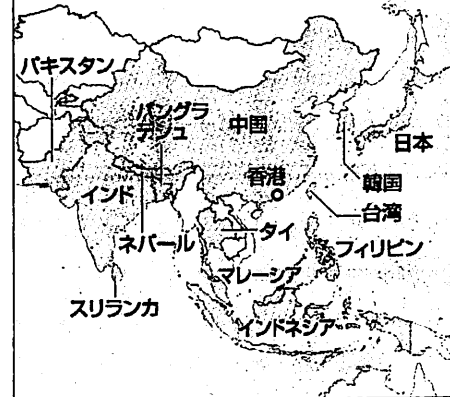


私たちの試み 韓国で開花



日韓の女性労働運動に携わってきた人たちが、肩を組み労働歌を合唱した—6月2日、東京都千代田区で、筋野健太撮影

アジア女性労働者委員会加入の女性労組などがある国・地域



韓国語と日本語の労働歌の合唱が会場に響く。先月2日、軍事政権と闘った韓国の女性労働者たちを描いた「鉄条網に咲いたツルバラ」日本語版の出版記念会が東京都内で開かれた。「女性の労働組合をつくって女性の声を拾い上げよう」。本に登場するイ・ヨルスンさん(53)の訴えに、駆けつけた塩沢美代子さん(83)は聴き入った。

アジアに広がる、女性による女性のための労組。ここまでの道のりには、2人から連なる世代を超えたパトンのつながりがあった。

「移動が自由な日本人の立場を生かして実態を見てきてほしい」。労働問題研究家の塩沢さんが、都内の韓国人牧師から韓国行きを頼まれたのは1978年のことだ。

「川にある繊維メーカー「東一紡織」で、劣悪な労働条件に抗議して女性工員が女性だけの執行部を選んだ。これをつぶすため、会社の意を受けた末端管理職の男性労組員らが労組事務所を乱入、汚物を浴びせる事件が起きていた。

朴正熙政権下では労働運動が規制され、活動家が入り込めない。敗戦後、繊維業界の労組の専従として製糸工場の女性工員と寝食を共にして争議にかかわった塩沢さんに、白羽の矢が立った。

観光客として入国。女性たちが立てこもる建物に地元住民のふりをして入り込み、話を聞いた。政府や企業からは労働者として弾圧され、男性主導の労組からは「女のくせに」と排撃される。

「日本とそういってしまっても、状況がわかっただけで、託された10本近い証言テープは当局に見つかれば没収。みやげもの店で買ったチマ・チョゴリ人形のスカートに隠して荷物検査を通過。事件を日本の雑誌に発表した。

韓国だけではない。フィリピン、インドネシアなどアジア諸国では、独裁政権の労働運動弾圧が横行していた。塩沢さんは各国を回って女性活動家の人脈作りを始めた。これをもちに、81年、働

「男は支えてくれない」悔しさ共に

女性を支える「アジア女性労働者委員会」(C.A.W)が結成した。

軍事政権が倒れた翌年の88年、「韓国からぜひスタッフを」との塩沢さんの頼みを受けて、C.A.W事務局がある香港にチヨルスンさんが事務局長としてやってきた。

夜間高校を卒業後、キリスト教の労働組織に支えられて工場に就職。東一紡織事件では現場写真入りのチラシをトラックいっばいつけて全国に配った。洗礼名から「マリア・リー」の名で知られる活動家だった。

「労働運動に男女はない」と思ってきたが、すぐれた女性活動家が結婚や出産で退いていく。女性に合った労働運動が必要と感じ始めていた「チヨルスンさんにとっ

ては、90年の来日で、8年前にできた日本初の女性労組「おんな労組」(関西)を知ったことが一つの転機になった。

発足メンバーの一人、屋嘉比ふみ子さん(58)は当時、京都のガス会社の社員。83年に合理化で指名解雇された。やはり男性中心の労組は支援せず、一人で解雇を撤回させた。反発した男性労組員たちは屋嘉比さんの車の周りにくきをまき、車体に卵をぶつけた。

「女はクビになっても困らない、生気、という」と。男性主体の労組は女性を支えてくれない」。悔しさが女性労組の引き金になった。

女性のための運動の必要は感じつつ、チヨルスンさんは「女性だけの労組」にまでは踏み切れないでいた。軍事政権への抵抗から生まれた「全国民主労組総連盟」への思いがあった。

だが、ためらいは97年のアジア通貨危機で消えた。失業率は前年の2・5倍に増え「朝鮮戦争以来の危機」と言われるなか、女性はずっと先にクビにされた。非正規雇用も急増、正社員中心の民主労組では対応しきれない。99年、チヨルスンさんは「韓国女性労働組合」を立ち上げた。

翌年、同労組1周年のフォーラムに招かれた屋嘉比さんと「女性ユニオン東京」の伊藤みどりさん(54)は、そのスケールに刺激された。

東京、北海道、新潟など女性労組は増えたが、活動は地域ごと。政治的なパワーも弱い。一方の韓国は全国組織。加入者も約6千人に膨らんだ。

2人の思いが裏り、今年1月、女性労組やNGOの個人加入による「働く女性の全国センター」がスタートした。「私たちの試みが海の向こうまで育ち、また戻ってきた」と伊藤さんは言う。

日本の女性が培ったネットワークの試みが、貧困に悩むアジアの女性の手で開花し、その成果が再び貧困が深刻化する日本へ還流する。越境する女性労組の動きを追う。

(編集委員・竹信三恵子)

◆次回から2面に掲載します。